

## 地元修復技術者の育成を

笠鉾「本蝶蕪」の部材を復元



市立博物館未来の森ミュージアム  
平成25年度冬季特別天覧会  
笠鉾大解剖！～バラバラにして見えてきたもの～(H26.3.23迄展示)に特別出展



▲復元された笠鉾「本蝶蕪」の骨格部分。構造から、本来“傘”であることがわかる



▲復元に取り組んだ会員と関係者

八代妙見祭を彩る「笠鉾」の骨格となる部材が、市内の技術者の手で復元され、8月20日に市役所ロビーで、その組立作業が公開されました。

この復元は、笠鉾など妙見祭の出し物を、地元で修復できる人材を育成したいとする八代妙見祭保存振興会(濱大八郎会長)の思いに賛同した、八代職業訓練運営会(藤永勝利会長)と八代高等職業訓練校技能士会々員13人が行ったものです。

今回は、9基ある笠鉾の一つ「本蝶蕪」の復元製作に取り組みました。昨年の6月から勉強会や調査・検討会を重ねた後、今年4月から約4カ月かけて主要な骨格部分が完成に至りました。

この日は、これらの活動と成果に対し、八代妙見祭活性化協議会々長の福島市長から藤永会長に感謝状が贈られました。

広報やつしろ 2013.10(H25)

2 八代高等職業訓練校での笠鉾「本蝶蕪」再現作業。笠鉾は約360kgをたった1本の柱(芯棒)で支えている。くぎは1本も使われておらず、一つでも順番を間違えると組み上がらない。手順は各奉納団体の長老の頭の中であり、口伝も多いそう。3 笠鉾の上に載る飾り(写真は蕪)制作。磨く期間は既に3週間を超えている。集積させた木で作ることではびが入りにくくなり、長くもたせることが可能なのだとか。4 5 今



絵巻通りに継承していくため「ハード面」の取り組みにも着手しているというので、八代高等職業訓練校へ向かうことになった。

ここでは昨年1月から、祭り道具の製作技術の検証と再現を行っている。現在始動中なのが、笠鉾の再現作業。祭り使われる笠鉾は、およそ300年前より引き継がれてきたもの。随所に破損が見え始め、いつ使えなくなるかわからない。そう危険な演さんが地元の大工たちに協力を呼び掛け、試作してみることに。木の切り出し、削り、組み立て……。笠鉾の200にも分かれる部材を一つ一つ再現していった。ボランティア十数人で朝から晩まで、作業場で黙々と汗を流す。4月から4カ月かけ、骨組みはほぼできた。